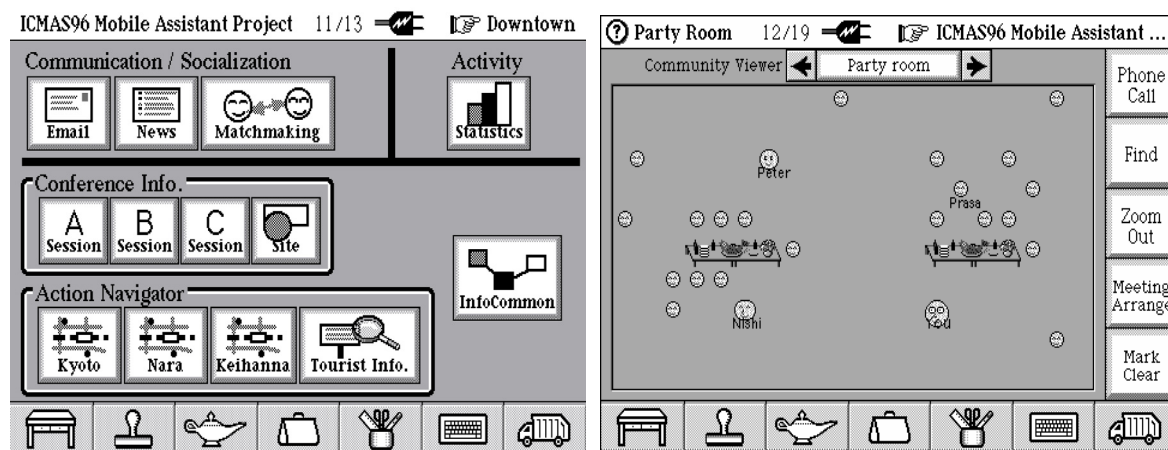


ICMAS96 Mobile Assistant Project(石田亨)

4大学ミーティングにはNTT研究所も参加していた。NTT研究所では、モバイルエージェントの先駆けとなった Telescript を用いた研究が行われていたが、その成果を実証する場を探していた。一方、研究室ではコミュニティウェアの研究を始めていて、やはり実証の場を求めている。折から、第二回マルチエージェント国際会議(ICMAS)を1996年12月に京都でという話が決まり、石田がプログラムチェアを引き受けることとなった。実際には運営の全てに関与する立場だった。4大学ミーティングの議論の中から「モバイルエージェントを用いて国際会議を支援する」というアイデアが生まれ、奈良先端大の西田先生のグループ、NTTの西部さんのチームと共同で開発が始まった。研究室では、会議での参加者のインタラクションを可視化するコミュニティビューワの作成が始まった。石田が初期プロトタイプをLispで作り、当時4回生の古村君と西村先生がMagic Cap上で完成させた。

こういう実証実験は大変だろうとは思っていたが、企業から大学に移籍して間もないことだったので、大学での開発が、どれほど大変か実感がなかった。京大チームの出足は遅かった。「早くしないと間に合わない」と何度も言うのだが、若い教員、大学院生にはソフトの開発経験がなく、試験の前日に徹夜する習慣が染み込んでいて、仕事は直前にするものだと思っている。恐れていたとおり、夏休みが明けても軌道にのらない。国際会議の1月前になって、ようやく目の色が変わってきたが、時既に遅し。ある者は下痢が止まらなくなった。ある者は喉の痙攣が止まらなくなった。ドクターストップをかけようと機能縮小を提案すると、充血した目で「ここまでやらせておいて今更やめるのか」と言う。困ったのは初めて大学との共同開発を経験したNTTのチームも同じだった。担当者は「もう大学とは一緒にやらん」と叫んでいた。考えてみると、難しいシステムに挑戦したものだ。国際会議は日程が決まっているから1日も遅れることはできない。学生が作るソフトも端末に組み込まれるので、エラーを起こすと端末全体がフリーズする。エラーも遅れも許されない。



左：機能一覧 右：研究室作のコミュニティビューワ

国際会議の日が訪れたときには、動かすことだけが目標になっていた。徹夜続きの開発チームの組み上げたシステムは見事に動作し、会期中一度もエラーを起こすことがなかった。ところで研究の目的は何だったって？ログが解析され論文が書かれたのは、それから1年後のことだった。